

英語じゃなくて

Glōb·ish

言語 グローバル化に適応した簡易型英語が
デジタル時代の新たな世界共通語になりつつある

ロバート・マクラム(英オプザーバー紙編集委員)

ややこしい構文や難しい単語はもう要らない？
語彙が少なく表現もシンプルな英語が世界に
広まっている。英語が母国語ではない人も言
いたいことを容易に伝えられる新しい言語――
それが「グロービッシュ」だ。

北

京にある中国人民
大学の卒業生は、
ポスト毛沢東世代
の典型だ。毎週金
曜日の夕方になると、数百人が自
発的に「英語コーナ―」と呼ばれ
るキャンパスの小さな広場に集ま
る。目的は、もちろん英会話。

彼らはグループに別れ、つたな
いが熱っぽい英語でサッカーや映
画、パリス・ヒルトンのようなセ
レブについて語り合う。大人数で
声を合わせ、バラク・オバマ米大
統領が08年の選挙戦で使った「イ
エス、ウィ・キャン」のようなス
ローガンを叫ぶのも好きらしい。
中国全土の大学構内で繰り返さ
れるこの光景は、教育レベルの高
い中国の若者たちの強烈な欲求を
よく表している。彼らの望みは、
「英語で会話する国際社会」の仲
間入りを果たすことだ。

中国は最もドラマチックな例だ
が、このような「英語欲求」は地
球規模で広がっている。おかげで

英語は国際語として新たな段階に
突入した。今では世界の総人口の
3分の2近くが、何らかの形で英
語を使っているとも言われている。
英語を母語とするのはおよそ4
億人。母語の人口では中国語に次
いで2位だが、中国語使用者のう
ち3億5000万人が何らかの形
で英語を使っているとされる。

とっつきやすく、順応性があり、
庶民的で、権威に反抗するための
手段でもある――今や英語は世界
を動かす原動力であり、グローバ
ルな意識の重要な一部だ。英語は
「世界の第2言語」に成長する一
方で、それ自体の形態や語彙も変
化している。グローバル化した経
済や文化のニーズに適応して言語
の単純化が進んでいるのだ。

かつて正統なイギリス英語から
「より民主的な」アメリカ英語に
移行した英語は、今度は世界の誰
もが使える新しい道具に変わるう
としている。この道具としての英
語は、「グローバル」と「インク



アメリカ英語 : This little tidbit of literary joy is amiable and a slam dunk to peruse, notwithstanding the fact that it has the overwhelming gall to propose a revamping of our methods of verbal exchange around the world.

グロービッシュにすると : This book is easy to read and with pleasure. Still, it proposes a complete change in the way we communicate around the world.

(この本は読みやすく、面白くて引き込まれる。なのに一方では、世界中で私たちが行っている言語コミュニケーションの形を一から変えるべきだと指摘している)

リッシュ」を掛け合わせて「グロービッシュ」と呼ばれている。グロービッシュが初めて注目されたのは05年、デンマークの新聞がイスラム教の預言者ムハンマドの風刺画を掲載したときだ。イスラム圏では多くの人々が怒りを爆発させ、各国で抗議デモが起きて139人が死亡した。

最も奇妙な反応は、ロンドンのデンマーク大使館前でイスラム過激派が行ったデモかもしれない。彼らは英語でシユプレヒコールを叫び、英語のプラカードを掲げた。「イスラム教を侮る者を血祭りに上げる」「表現の自由などクソ食

らえ」。私が特に気に入ったのは「DOWN WITH FREE SPEECH (打倒、言論の自由)」だ。

インターネットで世界がつながる時代になり、世界に対する自己アピールの表現方法も劇的に変化した。少なくとも私はそう確信した。イスラム過激派はイギリスが昔から享受してきた自由を英語で行使する一方で、自分たちのデモを認める自由の伝統そのものを抑え込めと要求したのだ。英語の普遍化の例として、これほどシユールで印象的なものはない。

語彙は1500語だけ

この変化に気付いたのは私だけではない。インタナショナル・ヘラルド・トリビューン紙は07年、IBMの元幹部だったフランス人のジャンポール・ネリエールの記事を掲載した。この記事でネリエールは、国際化した英語を「3000年紀の世界方言」と呼んだ。

ネリエールは日本IBMにいた90年代、英語が母語ではない人が話す英語のほうが、英米人よりずっととうまく韓国人や日本人の顧客と意思疎通を図れると気付いた。英語を第1言語とする人間にとって、標準的な英語は極めて便利なコミュニケーションツールだ。しかし途上国の英語使用者は、表現を簡単に「nephew (甥)」を「the son of my brother (おやうだいの息子)」、「oath (誓約)」

を「words of honor (誓いの言葉)」などと言い換える。ネリエールはこの新しい英語を「グロービッシュ」と命名した。

この呼び名はすぐに国際社会の注目を集めた。英タイムズ紙の記者ベン・マッキンタイアは、インドの空港で耳にした国連平和維持部隊のスペイン人兵士とインド人兵士の会話をこんな記事にした。

「インド人はスペイン語を、スペイン人はパンジャブ語を話さなかったが、難なく理解し合っていた。彼らが使ったのは、文法も構文も無視した極めて簡単な英語。それでも互いに理解できたし、私にも分かった。今から思えば、彼らが話していたのは世界で最も新しく、最も広く使われている言語——グロービッシュだった」

ネリエールはグロービッシュを言語ツールと見なし、語彙が1500語だけの「簡易英語」と定義した。だが私に言わせれば、グロービッシュは基本的な英語にデジタル時代の用語やニュース表現を取り入れた新しい世界共通語だ。

私は80年代半ば、BBC(英国放送協会)の長編ドキュメンタリー「ストーリー・オブ・イングリス」の制作に関わった。この仕事を通じて分かったのは、イギリス英語はチャイソーヤやシェークスピアの時代から何百年もかけてゆっくりに発達した後、19世紀の帝国主義時代を通じて世界的な覇

権を確立したという事実だ。

大英帝国の旗が翻る世界地図は、正統英語圏の地図でもあった。1897年に即位60周年を迎えたビクトリア女王は世界の臣民に向けて、耳障りな声で「グッド・イブニング!」と呼び掛けた(彼女は新しい録音技術を用いて演説した最初のイギリスの君主だった)。

この第1段階では、英語と帝国主義は不可分であり、そのことが英語のさらなる成長を阻んでいた。第2段階に入ると、2つの世界大戦が重要な契機となり、英語のパワーと影響力を行使する主体はアメリカに移った。そして冷戦期を通じ、英米文化は映画や新聞雑誌といったマスメディアを經由して世界中の人々の意識に入り込んでいった。ただしこの段階でも、イギリスの帝国主義とアメリカの覇権に対する反感が英語の普及の足かせになっていた。

もう英米文化とは無関係

だが、冷戦の終結と90年代に続いた好況が英米文化の優位性と過去の歴史を分離し始め、世界に広まっていた英語に対する抵抗感は一気に薄れた。人々はジョージ・W・ブッシュ米大統領(当時)を嫌い、星条旗を燃やす一方で、アメリカのポップスターに憧れたり、アップルのハイテク機器に大金を使えるようになった。

21世紀の到来とともに、英語と

アメリカ英語：Native English speakers can't quite hack it when they need to dumb down to the 1,500 key words. The language they have to speak or write is expected to be kosher, if not perfect.

グロービッシュにすると：Native English speakers have great difficulties when they want to reduce their words down to the 1,500 key ones. On top of that, the language they have to speak or write is expected to be correct, if not perfect.

(英語を母語とする人々にとって、主に使う単語を1500まで減らすのは非常に難しい。彼らは完璧とは言わないまでも、正しい言葉で話したり書いたりしなければならない)

英語文化は問題の多い過去と決別したようだった。英語は国家の枠を超えた勢いを手に入れ、起源である英米とは別個の存在になった。ルーツから解放された英語は、途上国に深く浸透し始めた。チリとモンゴルは03年、英語教育を充実させて国民をバイリンガルにしたいと表明した。06年にはメキシコの小学校で、英語が必修の第2言語としてカリキュラムに加えられた。伝統的にフランス語圏だったルワンダは08年、英語を公用語に採用した。

中国では約5000万人が「英語のエルビス」と呼ばれる李陽の

英語学習プログラム「クレージ1・イングリッシュ」に登録している。「英語を征服し、国を強くしよう」というスローガンを掲げる李は、1度に1万人以上の生徒を教えることも珍しくない。彼は伝道師であり、訓練係の鬼軍曹であり、教育者だ。サッカー場に生徒を集め、日常的な英語のフレーズを騒々しく繰り返す。

「元氣ですか？」と李がスピーカーで叫ぶと、「元氣ですか？」と群衆が繰り返す。次に李は時代遅れの古い俗語で「すこぶる元氣！」と叫び、「すこぶる元氣！」と群衆も叫び返す。

グロービッシュの広がり方は、トップダウンではなくボトムアップ型だ。詩人ウォルト・ホイットマンはかつて、英語は「辞書編集者の抽象的な構築物」ではなく、「その基礎は広く、地面に近い低い場所にある」と書いた。

1066年のノルマン・コンクエスト（ノルマン人のイングリッシュド征服）によって宮廷から追放されて以来、英語はずっと庶民の言語だった。それは今も変わらない。英語はもうアメリカにもイギリスにも依存していない。今の英語を形作っているのは英語を第2言語とする人々であり、彼らの文化的特質は英語で表現されるが、英米文化とは無関係だ。

09年のアカデミー賞を獲得した『スラムドッグ\$ミリオネア』の

ような映画には、グロービッシュの拡大を促す力がある。この作品は多様な言語と文化的背景を持つキャストと製作チームが作り上げた、言語と文化の衝突の物語だ。せりふは英語、ヒンディー語、アラビア語が混在しているが、最後は必ずグロービッシュに戻る。

グロービッシュは既に多くの場面で世界的事件に影響を与えている。昨年イラン大統領選では、反体制派が不満を世界に伝えるためにグロービッシュを使った。彼らは携帯電話の画面に「今こそ自由で公正な選挙を！」といった英語のスローガンを掲げ、ツイッタ―でつぶやき、欧米の人々に事態の緊急性を伝えた。

言葉の壁は消えないが

短期的にみれば、グロービッシュは今後も拡大するだろう。インターネットのホームページに使われる言語は約70～80%が英語とされる一方、ドイツ語は4・5%、日本語は3・1%にすぎない。

国際文化交流機関ブリティッシュ・カウンシルによれば、2030年までに英語の学習人口は世界の総人口のほぼ3分の1に達するという。つまり、ますます多くの人々が英語に目を向け、グロービッシュに共通の言語的基盤を見いだすということだ。

著名なイギリスの教育者エリック・アンダーソン卿は、グロービ

ッシュが生死を左右するほどの重要性を持つようになった事実を示すこんな逸話を紹介した。

05年7月7日にロンドンで同時多発テロが起きる直前、あるアラブ人留学生がロンドン南西部から金融街シティーにある学校へ行くため、地下鉄に乗ろうとした。だが最寄駅が閉鎖されていたので、やむなくバスで行くことにした。

乗車中、学生の携帯電話が鳴った。CNNでテロのニュースを見たアテネにいるギリシャ人の友人からだ。友人はグロービッシュの隠語で「最新ニュース」を伝え、ロンドンのバスはテロの標的だと警告。この会話の後、学生はバスから降りた。1分後、このバスは自爆テロ犯によって爆破され、多数の人命が失われた。

もちろん、言葉の壁がなくなることはない。世界はかつてなく小さくなったが、今も約5000種類類の言語のパッチワークだ。

人は母語にこだわるものだし、それは大切なことだ。だが、それも状況による。アメリカ中西部のあるベンチャー企業は先日、インド人とキューバ人の顧客から、イストラエルの技術者の協力を得ながらウルグアイの研究所から委託された医学研究を進めたいと言われた。この場合、関係者はグロービッシュに頼るしかなさそうだった。(筆者は近著に『グロービッシュ』などがある)